

1 審議会委員の御意見と骨子案との紐づけについて

長期ビジョン骨子案(12/10 第3回審議会提示)			委員意見
章	節	小見出し	
第一章 長期ビジョン策 定の背景	第一節 世界文化自由都 市宣言(1978年) ー世界史を担うま ち	ー	<第3回審議会(12/10)> 【宗田会長】 ・世界文化自由都市宣言は、冒頭に「都市は理想を必要とする」という文章から始まっているが、世界が理想を必要としている時代だ。戦後約80年となり、世界は理想を持っていると思っていたが、今の世 界はとてもそうはいえない状況になっており、25年後に京都から、何か理想のようなものが発信できる状況になっていたら素晴らしい。そのため、世界の理想を何か提言できるような、過大な希望かもしれな いが、それぐらいの京都になればいいと思っている。
	第二節 京都市基本構想 (1999年) ー21世紀の到来を 見据えて	ー	
	第三節 長期ビジョンの策 定(2025年) ー「都市の理想」を 再び掲げて	ー	
第二章 京都市の成り立 ちとこれまで	第一節 悠久の自然との共 存の中で	ー	
	第二節 歴史の重なり、文 化の奥ゆき、ひと の連なり	ー	<第3回審議会(12/10)> 【牧委員】 ・京都は天災には見舞われずにきたが、戦乱によって何度も焼かれ、立ち直ってきた。そこが京都の良いところ。被害を完全に防ぐことはできないので、被災後どう立ち直っていくのが重要である。レジリエ ンスが高いことが京都の強み。
	第三節 矜持と節度、夢中 と静穏のもとでひら かれたまち柄	ー	

1 審議会委員の御意見と骨子案との紐づけについて

長期ビジョン骨子案(12/10 第3回審議会提示)			委員意見
章	節	小見出し	
第三章 京都市のいま	第一節 前四半世紀における世界の動き	人口動態・産業構造の変化	＜第2回審議会(11/11)＞ 【杉田委員】 ・ 西洋型のいわゆる近代都市の規範的な部分が見えてきている時代になったと感じる。例えば、近代都市においては、気候変動や環境破壊、まちの均質化などの問題がある。あるいは、自動車中心になり過ぎて人間が徒歩や自転車で移動しづらいなど、まちのデザインがヒューマンスケールからかけ離れている。こうしたことを背景に、近代都市の限界がグローバルに議論されているのが現状。
		デジタル化の進展	＜第1回審議会(10/9)＞ 【濱崎委員】 ・ 「身体性」、「直観力」というキーワードも重要であり、非対面コミュニケーションが盛んになる中においてもやはり「場」が大事。 ＜第2回審議会(11/11)＞ 【田中委員】 ・ デジタルツールが発展する中で、若い世代にとっては「分かりやすさ」も大事なのではないか。 ・ 京都の暗黙のルールや美学は素晴らしいものである一方、それは空気を読むようなもので「分かりにくさ」を感じる。情報発信、広報、認知拡大をしていくなかで、自分たちの美しさをオープンにしていくなかで、これからの時代に必要ではないか。分かりにくさが美しさだったりするが、そこが時代とともに変わってきているように感じる。 ＜第3回審議会(12/10)＞ 【曾我副会長】 ・ 25年前にはスマホもなく、中国から来た製品などもそれほどなかった。本当にグローバル化、デジタル化が圧倒的に進んだ。
		環境問題・自然災害への対応	＜第2回審議会(11/11)＞ 【松井委員】 ・ 京都議定書で世界中に気候変動対策を呼びかけたにもかかわらず、未だに対策は進んでいない。
		感染症の脅威への対応	＜第1回審議会(10/9)＞ 【牧委員】 ・ 新興感染症が発生するかもしれないし、その場合被害をゼロにはできないので、京都をどう再建していくのかというところが大変重要。
		差別是正への取組	＜第1回審議会(10/9)＞ 【阪部委員】 ・ LGBTや性的マイノリティーという視点から、昨年、LGBT理解増進法が制定されたが、現実社会としてはほとんど動いていない。 【藤野委員】 ・ 京都市は国際都市として世界に名だたる都市でもあり、ジェンダー平等への高い関心があってしかるべきかと考える。 ＜第3回審議会(12/10)＞ 【宗田会長】 ・ DEIはアメリカ、ヨーロッパではそれぞれ大変苦しんでいるテーマである。いわゆる多文化共生などと、割とのんびりと言っている時代ではなくなっている。そして、世界が激動している中で、京都のような地域社会が、このDEIをどう考えるかということも大きな課題である。この25年間で、だいぶ進んできたが、同時に、インバウンドが急増している現状において、インバウンドに対してどう対応するか、どう京都に合わせてもらうのかという議論もある。
		戦争・紛争の持続と激化	＜第2回審議会(11/11)＞ 【安保副会長】 ・ 世界の観点から見ると、世界的に次の大戦が勃発するのではという危機感がある。現時点では定かではないが、後から考えれば、現在が次の大戦が引き起こされるまでの中間地点にいるのではというような危機感である。京都は第二次世界大戦の影響は小さいが、都であったため歴史上は幾度も戦争を経験している。例えば、応仁の乱や蛤御門の変でまちが焼けたが、その中で人々はくらしを続けてきた。観光だけではなく、人の生活を基盤にした平和を発信できる都市ではないかと思う。 【曾我副会長】 ・ 京都は1000年以上続く古い都市だが、歴史の中で繁栄し続けていたわけではない。東京 奠都のときもそうだが、衰退と復興を経験してきたまちである。そうした経験は、今、世界中で戦争や自然災害の脅威が鮮明化する中において重要。単に長く続いているという表面的な部分だけでなく、京都というまちがどのように危機に向き合い、復興してきたのかを伝えることができると、もう少し深みが出てくる。 【貫名委員】 ・ (世界では)戦争、移民問題の大きなことに悩んでいるところもある。
		ESG/SDGs等の成果と限界	＜第3回審議会(12/10)＞ 【藤野委員】 ジェンダーの観点から言うと、近代の権力構造によって、女性が担ってきた領域、つまりケアなどが不可視されてきたことから、むしろ一元的な状態になっていたとも言える。SDGsは、そうした近代の権力構造によって不可視化されていたものを可視化するという大きな意義を持ってきたと思うので、重要な取組だと考えている。 【堀場委員】 サステナビリティやSDGsなどを今さら外国から言われたくないというのが私の考えの根底にある。京都、日本は、そうしたことを大上段に振りかぶらないで、自然にやってきている。

1 審議会委員の御意見と骨子案との紐づけについて

長期ビジョン骨子案(12/10 第3回審議会提示)			委員意見
章	節	小見出し	
第三章 京都市のいま	第二節 基本構想策定以降の京都市のすがた	人口動態の変化	<第1回審議会(10/9)> 【鈴鹿委員】 - 京都市には人を惹きつけるコンテンツがあり、子育て世帯にとって魅力となるものも多い。しかし、様々な施策、対策は文化に興味がある人に向けたものとなっており、子育て世帯に対して効果的に作用していないと感じる部分もある。 【高屋委員】 - コロナ禍で地域のつながりが希薄化した現状を重く受け止めている。単身或いは2人世帯が増えており、地域活動に協力してくれる方が1世帯に1人いるかどうか。かつてのように協力を得られなくなっており、町内会に入っていないければ、そもそも協力を得ることができないという状況。 【田中委員】 - 同世代は子育て世代なので、住まいや交通の面で「京都に住みたいけれども住めない」という声をよく聞く。住みたい人が心地良く住めるまちづくりは、次のビジョンにおいても重要なポイントになる。 【藤野委員】 - 特に少子化との関係でいうと、先進国でジェンダー平等が進めば、出生率が回復している。現在、京都市でも少子化が進んでいる背景には、ジェンダーの平等が進んでいないという問題があるのではないか。 【プラー委員】 5万5千人の外国籍市民が京都市で生活しているので、全人口の3%程度になる。また、留学生数が2倍に増えている中で、「伝わりやすさ」の観点はとても必要だと感じている。皆さんが発信しやすい、意見を出しやすいような取組を、ぜひ進めていただきたい。 【宗田会長】 - 単身世帯の割合は高くなっていく予想である。実態として一人になっていたとしても、本来人はつながりを必要とする。年齢や性別を問わず単身世帯化している状況の中で、かつての家を単位としてつながる地域から、個人がつながるコミュニティにどうシフトしていくかということだと思うが、難しい問題である。 <第2回審議会(11/11)> 【鈴鹿委員】 - 子どもが一人で遊びに行ける場所が減っている。公園も狭くなり、治安の問題もあって勝手に遊びに行かせるということとはできない。場所や生活リズムの問題、町内会が希薄になっていることも要因。 【藤野委員】 - 町内会自体もいろいろな意味で、時代に合わせて変化していかなければならないと思う。コミュニティのまさに「空間」での助け合いも重要だが、一方でSNS、IT技術を併用して、コミュニケーションをしたり、効率化を図ったりすることも重要。 【プラー委員】 - 言葉が分かるかどうかで得られる情報が異なる。例えば、ごみの出し方や町内会も独特のルール。海外からすると結構複雑なルールがあり、分からないこともある。海外の人をどのようにサポートし、巻き込んでいくかが重要。 <第3回審議会(12/10)> 【松井委員】 - 感染症に限らず、人口減少や少子高齢化という具体的な問題は、目前に、そして急激なスピードで襲ってくる。
		産業構造の変化	<第1回審議会(10/9)> 【榊田委員】 - スタートアップを支援するということの本質を考えなければならない。ゼブラ企業やユニコーン企業はそうそう出てくるものではない。そうしたものが京都を豊かにするには必ずしも思えない。もっと草の根のスタートアップコミュニティを作っていくべきではないか。 <第2回審議会(11/11)> 【赤松委員】 - 京都で文化に触れるには言語のハードルは高いが、日本語学校の生徒やリピーター・ツーリストのための案内、バカンスを利用して日本語を学ぶプログラムなど、そういうのはどれくらいあるのか。オーバーツーリズムと市民が共存していく形があるのではないかと思う。 【鈴鹿委員】 - 中小企業は働き方に融通が利くところが多いが、大手の企業のほうがさらに手厚い。中小企業はそれに太刀打ちできずに、人が大企業に流れ、人員が不足してしまう。柔軟な働き方ができるのにも関わらず人員不足で、一方で、大学生は京都に就職先がないという。このギャップが埋まって欲しい。 【曾我副会長】 - 京都のまちが「観光」の対象として見世物のように扱われることが「消費されている」という感覚に結びつくのはよく分かるし、実際に「観光」に起因する問題も色々あるわけだが、他方で、一概に観光に來ないで欲しいとはならない。しかし、「消費」の対置として観光客に何かを「生産」してもらわすべき考えるのも違和感があり、「観光」を消費するだけではないものとするためには「京都を知ってもらう」ことが重要。 【藤野委員】 - 誰しものが地域の人とつながったり、育児、介護などケアに従事したりする権利があるにもかかわらず、長時間勤務等により、真のワーク・ライフ・バランスを実現できないという企業社会における働き方が深刻な問題。 【松井委員】 - 京都の場合は、地元の学生より全国から来ている学生が多いので、卒業生の多くは地元に戻るか東京へ行き、なかなか京都に定着してくれない。

1 審議会委員の御意見と骨子案との紐づけについて

長期ビジョン骨子案(12/10 第3回審議会提示)			委員意見
章	節	小見出し	
第三章 京都市のいま	第二節 基本構想策定以降の京都市のすがた	環境負荷低減と防災の取組	<第1回審議会(10/9)> 【牧委員】 - 南海トラフ地震は来るだろうし、もしかすると首都直下地震も来るかもしれないし、気候変動もある中、どれだけ大きな被害が発生するのかは分からないが、大変災害が多い25年間になるだろう。 <第2回審議会(11/11)> 【杉田委員】 - 京都は道を車が行き交い、歩きにくく、緑がそんなに多くないので、体感として涼しさを感じない。
		医療・社会福祉の取組	<第1回審議会(10/9)> 【鈴鹿委員】 経済的側面から生じる分断については、生きること必死にならざるを得ない状況が作り出しているものであり、全体を見るうえで忘れてはいけないところだと思う。子どもの貧困が京都市内でも大きな問題になっている。実際の生活に焦点を当てていかなければならない。
		教育・研究の取組	<第2回審議会(11/11)> 【高屋委員】 今、子どもたちにも余白がない。小学校にも余白や余裕がない。ぼうっとしている時間がない。 【濱崎委員】 - 文化的なものや感じる力を育む場は、私の視点からすると減っている。余白のような場所にしても、使い方を決められていることが多い。かつてはもっと様々な使い方ができる場がたくさんあった。 【宗田会長】 - 大学生が全国から集まるので羨ましがられるが、一方で、就職しないのは、あまりにも大学生が多すぎるから。
		文化都市としての取組	<第1回審議会(10/9)> 【赤松委員】 - 学生が大学卒業後に外へ出ていくという課題がある中、芸術に関しては、私もそうだが、多くの学生が市外からやって来て、そしてアートをやっていくには魅力のあるまちということで、京都に残るケースがかなり多い。若いアーティストを支援するというのも京都ならではの施策であり、特に近畿圏周辺を見てもそういうところはない。 【杉田委員】 - 建物のリノベーションに携わっていると、大変立派な歴史ある町家を取り壊されて駐車場になってしまうという光景を週に1度は目にする。一方で、何十年も空き家のまま放置するのも、安易に取り壊してしまうことと同様に問題である。所有者の権利が強すぎるのが根本的な課題であり、まちの公共性を捉え直すことで、この問題を軌道修正できるはず。 <第2回審議会(11/11)> 【濱崎委員】 - 京町家が一日3軒なくなっている状況や、しかもその状況を知られていないことや、京町家の価値そのものが観光だけでなく文化や人を育む場であったことをみんなで認識したい。 【藤野委員】 - マンション開発が盛んで不安に思う。全国的な潮流なのかもしれないが、自然がどんどん開発され、マンションが立ち並ぶようになっている。長期的な視点でまちを守ることができているのだろうか。 【松井委員】 - 京町家がたくさん遺っていて京都らしい街並みだといわれるが、実際にはそうでもない。バルセロナやパリ、ロンドンにいくと、昔ながらの伝統を感じる。京都もそういうものを意図的に遺していかないといけない部分だと思う。 <第3回審議会(12/10)> 【濱崎委員】 - 現在の京都の姿をいろいろ記載いただいている中で、都市の景観の話もあった。現行基本構想以降、京町家に関する取組が活発にあったので、そういったことの話もあれば良い。
		市民参加の取組	<第3回審議会(12/10)> 【宗田会長】 過去20年、30年にわたって、京都市は市民参加推進を随分図ってきた。100人委員会をつくるなど、市民と一体となって取組をしてきた。

1 審議会委員の御意見と骨子案との紐づけについて

長期ビジョン骨子案(12/10 第3回審議会提示)			委員意見
章	節	小見出し	
第四章 京都市のこれから	第一節 自然への畏敬と感謝を抱けるまち	—	<第1回審議会(10/9)> 【杉田委員】 「More-Than-Human」という考え方も重要。都市に住むのは人間だけではないことに気づき、自然と人間がどのように同居すべきかを考えることが大切である。 【塚本委員】 - 京都には、言葉に表しにくい「風情」というものがある。それは誰でも真似できるものではなく、簡単に引き継げるものでもない。また、京都への「思い入れ」がないと、残していけない。京都のおもてなしの心、先人から引き継いできた京都の味、伝統に裏打ちされた技、京都の人々が工夫してきた暮らし方などは、後世に残していきたいものであると感じている。 【貫名委員】 - 近年京都を語る時に「ハレ」の部分が強調され過ぎている気がする。京都にはこんなお祭りがある、おいしいものがあるということももちろん大事なのだが、「ハレ」に対する「ケ」の部分も重要であると考えている。つい何か変わったことをしがちだが、「日常の幸せ」のようなものに焦点を当てたい。 - 京都は何を置いても地の利が強く、豊かな自然環境があってまちができています。水があり、食が生まれ、住処が生まれ、文化が生まれたのであり、全ての基盤となっている自然環境を改めて見つめ直さなければならぬ。 【濱崎委員】 - 私にとって京都は、そこにいると「ほっとする」まちである。なぜ「ほっとする」のかを考えると、歴史の一部に自分がいるという安心感が得られるからなのではないかと思う。歴史があって、ほっとできる。京都の文化的背景には豊かな自然環境もあるかもしれない。 【牧委員】 - 京都の良さをどんどん伸ばしていくことが、災害に対して強いまちをつくる上で大変重要だと思う。また、災害発生後はお金が必要となる。資料に企業立地促進・地域の活性化ということで、醍醐、洛西、京都南等を記載していたが、仕事があって、そこでお金が稼げるということも災害から立ち直る上で大変重要だ。今まではずっとまちを守るということをやってきたが、そういうことに加えて、稼げる場所もしっかりと整備しておくことが重要。 <第2回審議会(11/11)> 【小川委員】 - 多少不便があっても、あるものが好きで住むのがまちの基本。最も重要なのは何を優先して何を優先しないか、そして何かを諦めるよりそれも楽しむ、に変化させること。 【高屋委員】 - 地域のことをどう守るかとなると、みんなで力を合わせて守る。小さいことかもしれないが、町内会や自治会は防災という意味も含めて重要。 【濱崎委員】 - 言わなくてもそうだろう、と外から来た人も含め、皆がなんとなく分かることが難しい。感じる力を育むのが京都のまちや和室のしくみ。畳のへり、敷居といったものがあることで、開いたり閉じたり線の引きが身体感覚として養われていたのでは。たとえ教えられなくても、そのような空間にすることで、ある種の危険管理意識が育まれるのではないかと。かつての畳に戻れということではないが、良いところをうまく活用、利用し、身体感覚を育む空間構築を意図的に作る、見直すことができれば良い。 【松井委員】 - 京都の人はお茶会などで着物を着る機会があるが、他都市ではあまりない。これも京都の独自性であると思う。お茶の文化があるから着物を日常的に着る文化があり、お花や和菓子などの文化がそれぞれ関わり合って進化してきたのが京都の文化の独自性、強みであり、これを伸ばしていくことが重要。 <第3回審議会(12/10)> 【堀場委員】 - やはり京都は本当に風情があって何とも言えない魅力があると感じる。しかし、長く京都に住んでいるとその魅力が分からない。だから、この何とも言えない魅力をどう引き継いでいくかということは、日本にとっても非常に大切。

1 審議会委員の御意見と骨子案との紐づけについて

長期ビジョン骨子案(12/10 第3回審議会提示)			委員意見
章	節	小見出し	
第四章 京都市のこれから	第二節 歴史と文化を介して人間性を恢復できるまち	—	<第1回審議会(10/9)> 【榊田委員】 ・ 住む場所、働く場所、楽しむ場所があるというのが、まちづくりの重要な要素。これをどういうブレンドミックスでやるかということが重要。まちづくりのスタート地点の取組は地道なものだが、観光客の方々にもまちのストーリーに共感し、理解してもらいながら一緒にプロモートしてけるとよい。 【塚本委員】 ・ 京都には多種多様な企業と先輩経営者が若い起業家を目にかけ、物心両面で応援する文化もある。密度の濃い人間関係の中で、一緒に切磋琢磨するとともに、京都のブランド力を活かし、社会課題を解決する革新的な技術やサービスを開発し、グローバルに発信していく必要がある。 【濱崎委員】 ・ 近年、京都の歴史や文化が観光コンテンツと捉えられがちだが、そういった見方ではない、真に社会生活、経済にも結び付いた文化というものが循環している。 【原委員】 ・ これからを担う学生が多く、大企業を含めた多くの企業が京都から本社を移さない。それがほかにはない京都市の強み。 <第2回審議会(11/11)> 【小川委員】 ・ 京都は神社仏閣だけでない京都らしい風景、風情、精神性が担保できているのは、京都人の知恵があるからではないか。強かな知恵によって新しいものを取り入れつつ、自分たちが大切にしたいことには手を付けさせない二面制のある戦略を駆使してきた。大切に守るものと、流動させていくところを上手に使い分けているのが京都の知恵。昔から続くものを遺しつつ、新しいものを上手に活用して進めていけるかが世界にとっての唯一無二の京都にしていきたいために重要。 【榊田委員】 ・ 自分のことだけ考えていても商売は続かない。変化を続けながら、相手の立場を考えるのが京都。信頼関係の時間軸が大変長いのが京都。守りと攻めのメリハリをきちっと考える。相手を思いやる気持ちを商売でも大切にすることから、既存の客を大切にし、売り上げなんか伸ばさないと、とはっきり言う人はたくさんいる。 【鈴鹿委員】 ・ 京都らしさを計画によって制約しないことが重要。灰汁の強い人という意見があったが、一人一人のポリシーがあるというのはそのとおりであり、それを経済政策で制約しないことが重要。経済発展が、住んでいる人のためになっているのかという目線が必要。 ・ ビジネスの場では、どれだけ新しい人でも、既存のものや古いものへの尊重やリスペクトがあれば、あの人は京都人だね、と受け入れられる。古くから続いている商売の人でも、他者へのリスペクトがなければ排除される。どこまでが住民かという議論にも関わるが、心意気やリスペクトがあるという部分は重要。 ・ 文化の面で、本当はハードルが高くないのに一歩が踏み出せなくなっている。ハードルが高くないのに入ってこれない。例えば、かつて子どもをお寺に連れていくことは当たり前だったのに、そこに入る敷居が高くなっている。「入ってきていいんだよ、もともとそういうまちなんだよ」といった発信が必要ではないか。 【松井委員】 ・ 新しい京都をつくりあげていく中で、外国人に馴染んでいくというよりは、京都らしさにこだわるという一定のルールを守らないといけないと示せるような仕組みがあれば良い。京都に来る前に心構えを知ってもらう。かつて日本人が欧米に旅行に行き始めたときは、現地の人から同じように非難されていたが、今は京都で同じようなことが起こっていて、我々はそれを忘れて非難している。みんなで受け入れていくためには、京都のルールをどう伝えていくか。言葉の教育と同時に、京都に來たら京都のルールはこういことだと示せれば理解してもらえるのではないかな。 ・ 人口減少社会においては、社会資源をどう再利用していくかというのは重要なテーマになっていくはずである。観光客の受入れや高齢者の支援など、京都のキャパシティや包容力を高めていくうえで、地域の社会資源を多様な用途で再利用できるよう考えていかなければならない。潰して新しく施設を作るのにはコストがかかる。古いものと新しく必要とされるものをどうマッチングさせていくかは、大きなテーマになってくるはずだ。

1 審議会委員の御意見と骨子案との紐づけについて

長期ビジョン骨子案(12/10 第3回審議会提示)			委員意見
章	節	小見出し	
第四章 京都市のこれから	第二節 歴史と文化を介して人間性を回復できるまち	—	<第3回審議会(12/10)> 【鈴鹿委員】 - 文化の面については、過去の歴史が新たな未来につながっていくという観点は興味深い。市民が持つ独特の美的感覚や暮らしの知恵などがある。「京都の誇り」は、個々が属している文化に誇りを持つことにもつながってくると思うので、それが日常にあることを、分かりやすい形で提示されたら良い。 【曾我副会長】 - 生成AIは明らかに大きな分野になるのは間違いなく、そういう状況において、教育を今のような在り方で継続したとき、25年後に仕事はあるのだろうかと思う。技術の進歩について、少し後ろ向きに記載されている気がする。しかし、技術の進歩は止めようもないし、止めるべきでもないだろうし、それに対応することが必要ではないだろうか。 - 経済もデジタル化を生かさなかったら成長しない。京都のまちの問題に、大学卒業後に京都から流出してしまう問題があるが、生成AI等の技術は、大学や、学問を学んできた人間が、きちんとそれを生かせる仕事だ。そのため、デジタル化などについて、あまりネガティブなことばかりを書くよりは、そういうものが経済の中心になってくることを生かしつつ、それにどのように対応するのかを記載することが必要。 【濱崎委員】 - 町家という暮らしの空間・時間の中から生まれた文化が、いわゆる「伝統文化」になっている。そういう意味で、この数十年で生活空間にどのような変化があり、どのような取組をみんなで一生懸命に頑張っ

【牧委員】

- 何か大変な目に遭ったとしても、一人きりで頑張るだけではなく、周りの助けも受けながら回復できるのだというようなニュアンスがもう少しあっても良い。

【松井委員】

- 伝統文化といわれている多くのものを手掛ける方々は、おそらく、それだけでは生活していけないが、伝統を守らなければという想いで一生懸命活動されて、そこから更に多様に派生して活動を広げていらっしゃる。伝統文化の継承とは、技術だけではなく、理念や理想の継承なのだと感じた。つまり、京都で守っていかなければならないものはそういった、理念や理想ということ。

【宗田会長】

- コミュニティ防災とよくいうが、コミュニティが自分を守ってくれるのではなくて、自分がそのコミュニティを支え、守る側に立とうとすることによって、コミュニティの一員たり得るような、自立性こそ、いわゆる人間性を回復することにもつながるということだと思う。
- 町家があるから京都は偉大なのではなく、今生きている人が、そこにある伝統工芸を大切に、これまでを大切に作る気持ち、スタンス、哲学、理念があるから、町家の住民もそれをつないでいこう、さらにそれを紡いでいこうという姿勢がある。それが、京都らしいということ。
- 都心の文化だけが尊いわけではなく、その京都の洛外の周辺の自然や農業などにも京都らしさがある。「田舎に京あり、京に田舎あり」という言い方をする。
- 働き方の問題は、現在急速に見直されようとしており、京都のまちに暮らすことが、働き方を充実させるための大きな一歩になるかもしれないという京都らしさも追求していきたい。

1 審議会委員の御意見と骨子案との紐づけについて

長期ビジョン骨子案(12/10 第3回審議会提示)			委員意見
章	節	小見出し	
第四章 京都市のこれから	第三節 自他の生とともに 肯定し尊重し合える まち	—	<第1回審議会(10/9)> 【安保副会長】 ・「本物」であることに拘る部分というのが、「場」であり、たとえデジタル空間に移ったとしても、本物を追求し続けるのが京都なのだと感じる。 【小川委員】 ・ ネイバーフッドとか、地に足が着いた居心地のいい京都というのがシビックプライドにも密接に関係しているという側面がある一方で、デジタル化が進展する中で人口はますます流動化し、バーチャル市民であるとかファンエコノミーみたいなものが京都を動かしていくことは間違いない。 【杉田委員】 ・ 創造的な観光、すなわちクリエイティブ・ツーリズムを推進していくべきだと思う。京都にいる間にじっくりと考え事をしたり、ものづくりに取り組んだり、地域の人や企業と協業したり、何か一つでも自分が持っているものを京都に還元するという世界観を実現できたらと思う。 【鈴鹿委員】 ・ 京都というまちで様々なものが長く続いている秘訣は何かということを考えたとき、フレキシビリティ、すなわち常に動いていて柔軟性があること、そして、他者を侵害せず尊重するということの2点なのではないかと思う。この2点が京都で守られてきた結果として、分断を回避し多くのものが長く続いてきたのだと思う。 【濱崎委員】 ・ 対面して「そこにいる」ということの喜び、創造性、歴史的な場所や空間がもたらすインスピレーションといったものが非常に重要である。それは本当に京都ならではの良さであると思う。 【原委員】 ・ 移民については、難民として受け入れるのではなく国民として受け入れるという方向性を定めることが重要である。日本人とのトラブルが生じることもあるが、そもそも文化が異なる人々なのだから、きちんと日本の文化を伝えることで上手く融合していけばいいのではないかと思う。短期的な労働力不足の解消という視点ではなく、京都で働きたいと感じていただくことが重要。ひいてはそれが京都で暮らすということに結びつく。 【福富委員】 ・ 支援を受ける側の人たちが、ときには支援する側に回ったりすることができるように、従来の縦割を越えた連携や仕掛けづくり、「出番」を創出していく地域共生社会をつくっていく必要がある。 【宗田会長】 ・ この間、納税義務者が増加しているが、福祉を受けるだけではなく、支える側に回るという状況が生まれている。当然、必要な福祉を受けつつも、税や保険料を納めることはもちろん、働くことも含めて様々な形で支える側にも回っていただく。こうした大きな変化が高齢化社会の中で起こっている。 <第2回審議会(11/11)> 【赤松委員】 ・ 芸術は消費されるだけのものではなく、時代や地域を越えて価値が認められ、人々を豊かにするものであり、成長志向の社会の動きとは異なる方向性をそもそも持っている。日本初の自治体直営オーケストラが京都で生まれたことや、まだ価値の定まらない人々を育てていく姿勢で芸術活動を支えてきたことは、まさに京都というまちの在り方を象徴していると思う。 【安保副会長】 ・ 京都の人はそれぞれ个性的で自立しており、多様性が素地にあるのだろう。個人が自立することを大切にし、人格やプライベートに踏み込まないという意味で他人を尊重する。違いを認めているから、京都の文化は守るところは守り、自分の内の部分は尊重してやっていくため、京都はニッチな人が集まる素地があるのでは。 【鈴鹿委員】 ・ 「余白」がまちにも生活にもあると、尖った人を受け入れ、またそういう人が生まれる土壌になり得る。余裕がないと他者への尊重もなくなる。 【原委員】 ・ 町内会は、残しつつも足りないところは別のものを活用していくという在り方が考えられる。人と人とのつながりは大切にすべきなので、コミュニティの復活は必要。町内会や自治会でなくても良いが、そういう役割、つながりは残していく方が良い。自助努力されているところもあるので、うまく融合できれば。 【プラー委員】 ・ 多様な人、多様な価値観の共存が重要だと思う。京都に住んでいる人、国内外から遊びに来た人、価値観は様々。価値観を認め合うまちになってほしい。 【宗田会長】 ・ 京都は、入口さえ見つけられると誰でも入れる。東京は見つけても扉が閉じてしまっている。入ってしまえば、東京よりも京都の町内会のほうが平等に受け入れてくれる。入口を見つけ出しさえすれば誰でも入れるという自由さが、まさに世界文化自由都市宣言につながる。

1 審議会委員の御意見と骨子案との紐づけについて

長期ビジョン骨子案(12/10 第3回審議会提示)			委員意見
章	節	小見出し	
第四章 京都市のこれから	第三節 自他の生とともに 肯定し尊重し合える まち	—	<第3回審議会(12/10)> 【榊田委員】 ・ どれだけデジタル化が進展しようとも、人間中心であり続けること、すなわち人と人との関係性をいかに充実させていくのかということ。そして、多様性を伴うような社会構造の変化。つまり、多様な人々が、居心地がよいと思えるようなまちをどうやってつくっていくのかということ。 【阪部委員】 ・ 西洋的なDEIやこれまでの流れを踏まえたとえで、ダイバーシティという言葉やそういう項目として扱わずに、京都らしさ的なところで書いていこうという方針をお示しいただいたことに大変共感できる。日々、様々なLGBTQの課題に関わっている中で感じるのは、西洋的な価値観を特に前面に押し出し過ぎていて、社会が分断していたりするところが、京都らしさとあまり相いれない点。そういう意味で、「人の在り方を尊重し合いながら」のような表現は、すごく優しくて良い。ただ一方で、可視化という意味では、もう少し踏み込んだ表現も何らか必要かと思っており、その辺りのバランスが難しい。 【鈴鹿委員】 ・ 「安心」や「安全」という要素が希薄である。世界情勢などが変化してきている中で、「京都にはつながりがあるから、安心」ということは一つのキーワードになるのではないだろうか。ネットのつながりの中で交流が済んでしまうようになっても、やはり京都は顔と顔を合わせる地元の関わりが強く、町内会なども残っている。自治も根付いており、他都市に比べてそれによる安心というものがあるのではないか。 【曾我副会長】 ・ デジタル化が個人主義的傾向を強くしているというよりは、個別化された情報が取られていく時代。個別化された情報が取られていく時代に対して、どのように対応するのかという問題は大きいのではないか。 ・ 政治、行政の側が抱えている問題として特に大きいと思うのは、今も既に現れている分断化や分極化が、今後も、さらに強まることだ。京都において、そういうものと無縁であり続けられるなどということはない。 【高屋委員】 ・ 福祉の世界は特にそうだが、人口減少が進む中で支える側の高齢化が進行し、そうした人が一生懸命やっているのが現実なので、支え、盛り上げようと頑張っている市民の姿を、未来のビジョンに落とし込んでいただきたい。 【田中委員】 ・ デジタル化が個人主義的傾向を強化していると言い切るのは少し違うのではないか。デジタル化も一つの要因ではあるだろうが、時代の流れや、核家族化、単身世帯の増加などの要因もあるため、それだけではないと思う。 【原委員】 ・ 京都の良さというか、住んでいるところの良さは、やはり住みやすさや働きやすさがあってこそだと思う。やはりコミュニティというか、いろいろな固まりが大事。 【福富委員】 ・ 「構造的暴力」に言及していただいていることは大変良い。暮らしづらさの背景には、社会構造の問題がある。ソーシャルワークの考え方では、社会構造自体に如何にアプローチしていくかが重要だといわれている。干渉と予防に尽力していった先、すなわち構造的なゆがみや、暴力が徐々になくなっていった先に安心がある。普通に暮らせることが実は幸せで、それが私たちの、福祉の目指しているもの。人や職業等によって様々な違いがあると思うが、まずそういうところから排除されずに、その人としてきちんと暮らしていけることを目指すという辺りまで書いていただきたい。 ・ ケアする中で癒やされるなどという相互作用的なものがあるので、ケアする、されるという関係性の中に一体的な何かが起こっている。 【プラー委員】 ・ 京都人のプライドや、京都人の誇りなどを前面に出している。伝統を守っていくことに加え、その人間的なつながりをとても大切にされるという、第三節の中に書かれていることは、とても良いことだ。 外国人にとっても、大好きな京都。京都が大好きな外国人は多く、その人たちがどうしたら暮らしやすくなるのかということ、を入れていただければ。 【堀場委員】 ・ 海外の文化を否定しているわけでも、敵対する趣旨でもない。よく理解することが大切で、盲目的になるべきではないということが、私が強調するスピリットである。事実、事業をしても、そのスピリットに海外の人が惚れてくれる。やはり信念を持つ、動じない、文化的自信を持っているということが基軸となっていることが重要。 ・ 良い意味で外と馴染んでいく。外に対してアピールするということが重要であり、「京都市民は、京都は」とだけ言っていると、京都の中では良いが、特に日本の中で良くないと思う。むしろ、海外の人のほうが京都に対する誤解は少ない。 【宗田会長】 ・ 世界のことを結構意識するのが京都人の特質で、世界最先端の知見を持ち寄って、京都の景観政策、都市計画、福祉政策などに相当取り組んでいるので、まさに世界都市としての京都。

1 審議会委員の御意見と骨子案との紐づけについて

長期ビジョン骨子案(12/10 第3回審議会提示)			委員意見
章	節	小見出し	
第四章 京都市のこれから	第四節 京都市民のこれから	—	<第1回審議会(10/9)> 【安保副会長】 - 地域の市民参加も、形を変えながら続いてきた。 【榊田委員】 - 目指す方向性の一つは京都市を共創型のクリエイティブ都市にすること。そのためには、タウンミーティング等、京都市民や地域企業との距離を縮めなければならない。さらに、京都市内部で真のコミュニティマネージャーとしてのプライドを持った骨太の人財を育むことが必要である。 - 人口が減少していく中で、現在と同水準の行政サービスが維持できなくなるのは仕方がないのかもしれない。だからこそ、いずれそうした事態が避けられなくなることを前提に、周辺自治体との連携や行政サービスの統合などという課題について、将来を担う若手職員が自発的に向き合っていくことが必要ではないか。 【阪部委員】 - 京都市と関わっている中で強く感じるのは、市民参加を大切にしているというところ。性的マイノリティーや性の多様性に関する当事者団体や民間企業がネットワークをつくり、取組を開始しているが、国の施策がなかなか動かない中で生きづらさを感じている方がまだまだたくさんいるので、多様なまち、京都らしさという魅力をさらに伸ばしていくために、そういった方の声を拾いながら進めていければと思っている。 <第3回審議会(12/10)> 【安保副会長】 - 京都市民が、これは自分たちの未来を書かれていると思えるものである必要があると思う。昔でいう洛中の方や、それから洛外に住む方、社会で活動している方も、これは自分のことをいわれていると思えるようなものだ。 - 構造的に社会の周辺の張り付けられてしまっている人たちも多い。京都といえども、そういう社会の構造的な問題については、どうしても影響を受けざるを得ない。そういう方々にとっても、自分たちも市民であって、長期ビジョンの価値観と一緒に共有できる幅広いものであってほしい。 - どうしても大人しかイメージできないが、子どもも、教育されるだけの受け身ではなく、子どもは子どもの生活について主体的に参加できる、まだ社会で主流ではない若い人も参加できるなど、そういう京都の多層性の記載もあってほしい。そういうことができれば、私たちのビジョンという形で捉えることができ、子どもたちや若い人と話す時など、いろいろな場で活用できるものになる。 【榊田委員】 - 自分たちのまちは自分たちが一番責任を追っているのだという自治の概念をもう少し強く盛り込んでいただきたい。そして、ステークホルダーとしての行政、市民、そしてまちの個性になる企業。それぞれ立場が違う構成員がきちんと連携する、距離を縮めるという関係性が、長期ビジョンの中に現れると良い。 【杉田委員】 - 従来の考え方では、住民票があり、市民権があり、投票権があるというところで市民が定義されるのかもしれないが、ライフスタイルが多様化した今、様々な形で市民の在り方、京都への関わり方がある。 【曾我副会長】 - 人々がどういう形で公共的なものに対して関わっていくのか、その時に分極化してしまうのか、それともまとまっていけるのかという問題について、記載があっても良い。 【田中委員】 - 私は京都出身ではないので、過去、現在の情報量が少ないが、「みんなで作ってきたまちなのだ、後から住んでいる自分たちも、そこの一員になるのだ」というようなところは、理解しやすい。 - 京都出身で京都に住んでいる中高生が、第四章「京都のこれから」の部分を読んだ時に、学生たちがこれからどういうことができるだろうかと考えられるきっかけになる。また、京都のことをいいなと思っている人が長期ビジョンを読めば、自分がここに住んだり、京都に関わったりしたときに、ワクワクするような自分の未来があるなと思えるものになると、すごく良い。 【福富委員】 - 歴史や過去の様々なものの積み重ねから今の暮らしがあるけれども、これから先、一人一人が周りのために何かをすることで次の社会が形成されていくのだとしたら、「私」という主体それぞれに責任があるということを示すことが必要。 【プラー委員】 - 外国籍で長く日本に住んでいる人は、「国民」や「市民」という言葉に、自分が入れているのか、入れられていないのかが気になっている。「国民」ということになると、少し違和感があるが、「市民」という言葉になると、自分も含まれていると感じる。 【牧委員】 - 全て「私」が主体になるということは、災害から復興するにしても、安全・安心を確保するにしても、誰かがやってくれるのではなくて、「私」が何かしなければならぬということになり、最初は少し厳しいスタンスだと感じた。しかし、災害復興にせよ、安心・安全なまちづくりにせよ、一人一人が強くなり、きちんとやらなければ実現は難しい。無責任に社会はこうしなければいけないなどと言ってしまわないところに、厳しさも感じながらもかえって妥当なのではないか。 【松井委員】 - その場その場で、どうやって柔軟に対応していくのかということを考えながら、自分たちの責任を果たしていく、役割を果たしていくということが重要である。そうしたとき、基本的なビジョンがあれば、自分たちが何かやらなければいけない時に、目指す方向が明確であることで、将来何か大きな問題が起きた際にも、それを見返すことによって、自らの行動の規範とすることができる。

2 長期ビジョン全体についての御意見

	委員意見
文章表現について	＜第3回審議会(12/10)＞ 【安保副会長】 - 骨子案に少し硬いところがある。京都はすごく厳しく、きちんとした面もあるが、奥深い、寛容な深さがあって、それで受け入れてくれているところがあり、安心していられるところもある。そのため、長期ビジョンは、すべての方が自分のことをいわれていて、自分の理想にできるのだというような、少し柔らかく、それから寛容なものであってほしい。 【榊田委員】 - 全体的には、文体が難解なので、市民が読みやすい文章にとすべきだと思う。 【鈴鹿委員】 - 少し言葉が高尚過ぎるような気がする。京都の文化や言葉は、実際より敷居が高いように感じやすく、敷居が高いと感じてしまうと「もういいか」となってしまう。現時点ではあらずじなので多少難しい表現なのかもしれないが、市民に浸透させるためには読み進めたいと思うような文体を心がけて頂くと良い。 【原委員】 - 万人が読むものであるため、お年寄りの方、働いている方、学生の方、誰もが読みやすく内容が理解できる文章であってほしい。長期ビジョン本文以外に抜粋版なども用意して、パッと見て分かりやすいものを作っていただければと思う。 【プラー委員】 - 分かりやすい日本語で書いていただければと思う。ただ、分かりやすい日本語にこだわってしまうと、もっと難しい文章になってしまうため、長期ビジョン本文はある程度わかりやすい内容で、それ以外に、別紙で誰でも読んでもっと意味が分かりやすいものを作る。更に、自動翻訳などで読む人の言語に合わせて多言語化することで、もっと分かりやすくなる。自分の理解できる言葉で読めることは、とても重要。 【堀場委員】 - 我々もブランドブックなどを作るが、誰も読まない。読まれるのは口語体で分かりやすく書かれたものだ。一般市民に対しては口語調の分かりやすいものにするのが良いのではないか。
背景情報について	＜第3回審議会(12/10)＞ 【貫名委員】 本当に事実かどうか。特にイントロであるため、エピソードベースではなく、エビデンスベースで本当にそれが事実なのか、あるいは証拠があるのかという点を、少しだけ気にしたほうが良い。
視点について	＜第3回審議会(12/10)＞ 【鈴鹿委員】 - 子育て世代の目線からの意見であるが、「子ども」についての要素が薄いと感じている。やはり未来を見据えたときに、「子ども」に関する内容をどこかに盛り込むべきではないか。 【田中委員】 - キーワードとして少し少ないと感じたのは、子育てや教育、学びの多様化のようなところだ。学びや教育が今後どのようなようになっていくのかということは、ぜひ盛り込んでほしい。産業の発展や経済の部分についても書かれていることが少ない。 【貫名委員】 - 京都らしさの特徴として京野菜などと総称で捉えられるが、様々な視点がざっくりとひとまとめになってしまっている。我々京都の人間は、「すぐき」と聞くと北のほう、「九条ネギ」であれば九条、「桂ウリ」は桂を思い浮かべる。そこに地域性や、身体性や、人間性があるということで、どこに自身の視点を置くかで、全く物の見え方が異なる。昨今、京都像を語る時に、洛中の中心部に行くほど、非常に京都市的であるという語られ方をしがちだが、洛外といわれる地域に、様々な京都らしさのエッセンスがあるのではないかと思う。京都像をどこから見るかによって、全体の見え方が変わってくる。 【藤野委員】 - 子ども、さらに広くはケアの観点が欠けている印象を受けた。人は生まれてから死ぬまで、常に誰かのケアを必要とし、一人では絶対に生きていけない。また、ケアは受けるだけでなく、授けるものでもある。とりわけ子どもはそうで、親や周囲の人の世話になって成長していく。ケアは人間の基本的な営みであり、日々の生活だと思うが、現在の骨子案からはその点があまり見えてこない。つまり、様々な立場の人たちが読むものだと考えたとき、高尙な世界だけではなく、もっと日常に落とし込んだ視点も入れられたら良いのではないか。 【宗田会長】 - 世界観自体も、東洋、西洋、日本と西洋という捉え方や自然と人間という捉え方をするのではなく、もう少し幅広く物事を捉えていくことも重要かつ現代的な視点である。
構成について	＜第3回審議会(12/10)＞ 【曾我副会長】 - 未来があって、その未来に到達するために、現在からどうやっていったらいいのかという点が、骨子案では見えにくい。目標と予想を分けて、かつ、現在を認識した上で、その差をどうやって埋めるのかということを考えたほうが良いのではないか。 【濱崎委員】 - これまでの京都の成り立ちを語る中で、そうした非二元論的な視座がいかにして育まれてきたのだということを示すことができれば、ビジョン全体の中で納得できる形になり、大変良いと思う。それこそ理想論だが、現在・過去・未来がつながって「だから京都なのだ」というような、全体がぐるっとつながっていくような形にできると良い。